

5月例会報告

【日時・会場】2001年5月17日(金)19:15～21:15 筑波大学附属高校会議室～1:30 カリンカ

【参加者(会員)】内田正人(B&D) 黒崎健太(サラエヴォ・フットボール・プロジェクト) 笹原勉(日揮) 竹原典子(浦和レッズ・スチュワード) 中塚義実(筑波大学附属高校) 中村淳(筑波大学4年/現在母校で教育実習中) 脇田英人(スポーツマネジメント)

【参加者(未会員)】浅野智嗣(日本サポーター協会理事長) 稲垣秀行(日本サポーター協会) 伝法裕子(埼玉の市民ボランティア U-GET2002) 野上龍哉(日本サポーター協会) 宮川弘恵(横浜国際総合競技場ボランティア)

注) 参加者は、所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

本報告は、月例会での発表とディスカッションの内容を中塚義実がまとめ、参加者の確認を経て公開するものである。今回の発表は、7月22日に予定されている「コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム」の内容でもあり、詳細については、後日まとめられる報告書を参照していただきたい。

ワールドカップ・プロジェクト1ーコンフェデ杯から何かを残そう
竹原典子他(ワールドカップ・プロジェクト1)

「サロン 2002 の"志"を実現する上で、2002年 FIFA ワールドカップ韓国/日本大会は大きな節目であると認識する。国内外の様々な人々と協力しながら、この世界的なイベントの"成功"に貢献するとともに、同大会後の"ゆたかなくらしづくり"のためにできることを考え、行動する」とは、「サロン 2002 設立宣言」の一文である。ワールドカップのプレ大会であるコンフェデレーションズカップーサロンの会員にも関係者が何人かいるーをきちんと総括し、2002年に経験を生かすことは、サロン 2002 が取り組むべき活動であると考え、「ワールドカップ・プロジェクト1」が発足した。

今回は、サロン 2002 の発展過程をおさらいしながらプロジェクト発足に至る経緯について概観し、プロジェクト全体の概要、及び切り口の一つであるボランティアの視点からの報告があった。本報告は、当日の発表内容・資料とディスカッションの内容を中塚義実がまとめ、参加者の確認を経て公開するものである。

<目次>

<1> サロン 2002 の発展過程とプロジェクト

<2> ワールドカップ・プロジェクト1

1. 立ち上げの経緯

2. 目的と課題

3. 発展性

<3> ボランティア側からみた本プロジェクトの意義

<ディスカッション>

<1> サロン 2002 の発展過程とプロジェクト(中塚)

もともと、JFA 科学研究委員会のメンバーの中で社会学・心理学に関心を持つ者が「社・心グループ」の名称で小さな勉強会を開いていたのが始まりである。93年のJリーグ発足やワールドカップ招致活動など、サッカーをめぐる環境が大きく変化する中、「社・心グループ」の参加者も一気に多様化し、研究者の組織から一歩踏み出して、97年度より「サロン 2002」の名称で活動することとなった。

「来る者拒まず」の姿勢で、「サロン 2002」はネット上でどんどん大きくなっていく。組織のあり方が見直され、2000年度より、会員制の組織として生まれ変わった。節目節目でNPO 法人化の話も出ているが、現時点では、ゆるやかなネットワークとして「サロン 2002」が存在し、何らかの事業を起こす際に「プロジェクト」を立ち上げる形で進めている。「ワールドカップ・プロジェクト1」は、2000年度の「フットサル・プロジェクト1」に次ぐ、サロン 2002で2番目のプロジェクトである。

<2> ワールドカップ・プロジェクト1について(中塚)

1. 立ち上げの経緯

2000年度末の役員会で、ワールドカップ前年に当たって「何か」をしようという話が出た。そして、「コンフェデレーションズカップの成果はどのような形で総括されるのか」との問題提起から、成果と課題を次へつなげていくためにもシンポジウムを開こうということになった。

一方、Jクラブのボランティア・ネットワークを組織しようとしていた竹原は、コンフェデレーションズカップにおける取り組みをボランティア側から総括する場を模索中であった。そこで中塚と竹原で調整し、笹原を含めた3名が発起人となって、5月4日のサロン 2002総会で同プロジェクトを提案、サロン 2002公認プロジェクトとして活動することとなった。

2. 目的と課題

立ち上げ宣言にあるように、コンフェデレーションズカップで得られた知見を整理、共有し、ワールドカップ及びその後に活かすことを目的としている。具体的には以下の2つの課題に取り組む。

1) コンフェデレーションズカップ開催地における準備等諸活動の検討、反省、総括

そのために、「コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム」を7月22日(日)、横浜国際総合競技場内にて開催する。鹿嶋、新潟、横浜の事例をもとに検討。

2) 試合開催地が得た情報・経験を全国各地へ発信

そのために、上記1)を含めた「コンフェデレーションズカップ総括報告書」を作成し、ワールドカップ開催自治体、JAWOC、FA、ボランティア組織、市民活動団体等に配布する。

また、シンポジウムの様子や報告書の内容は、各メディアを通して積極的に配信する。

3. プロジェクトの発展性

「ワールドカッププロジェクト」には今後も継続して、様々な角度から取り組んでいきたい。それは、「この世界的イベントの"成功"に貢献するとともに、同大会後の"ゆたかなくらしづくり"のためにできることを考え、行動する」という「サロン2002の"志"」に沿った活動でもある。

<3> ボランティア側からみた本プロジェクトの意義

1. 背景－ボランティア情報の薄さ

2002年ワールドカップでの経験が、その後のJクラブを含めた日本サッカーの発展や観戦環境の整備につながると思い、それを実現する術として、竹原はJクラブの運営補助ボランティアを始め、同時に、サッカーに関連したスポーツボランティアの情報収集を行った。日本には、サッカーボランティアの活動状況や質に関する情報を提供してくれるマスメディアがなく、また、日本各地のサッカーボランティア同士のコミュニケーションの場もないため、お互いの活動についてほとんど情報がなかった。そこで次のような計画を立てると共に、ワールドカップ後を意識した活動を始めた。

2. 活動計画（平成12年1月より）

第1段階) Jクラブボランティア募集情報の収集

第2段階) Jクラブ間のボランティア同士の相互理解の促進

→ Jリーグボランティア活動レポート

第3段階) Jクラブ間のボランティア同士の情報交換の場の提供

→ サッカーボランティア掲示板、JボランティアML立ち上げ(関東圏)、Jボランティア交流会の実施

第4段階) ワールドカップに向けて、ボランティアに興味のある方の意識の高揚をはかる

→ ワールドカップボランティア募集情報等

第5段階) ワールドカップ・ボランティア募集团体に対し、サッカーボランティア情報の提供

→ JAWOC本部、埼玉県等の開催地自治体への広報活動

第6段階) ワールドカップ開催地にけるボランティアリーダーの把握と、コミュニケーションの促進

→ JボランティアのリーダーレベルMLの立ち上げ(現在15クラブ参加)

第7段階) プレ大会において研修をつんだ各地域のボランティアリーダーに、研修の情報提供依頼

第8段階) ワールドカップ開催まで、各自治体やJAWOC、KOWOCで提供されるボランティア情報を紹介し、最終準備に役立てる

第9段階) 2002年ワールドカップ終了後、日本各地のサッカーボランティアの協力で、日本代表の試合を各スタジアムで開催できるようなバックアップシステムを作る。

3. 日本代表をサポートする際に存在するボランティアの意識差とそれを取り巻く環境

上記の計画は6段階までは実現したが、以下のような現状のため、活動の進展が困難となっている。

1) Jクラブのボランティアが持つ意識差

JリーグボランティアのリーダーレベルでのMLで、コンフェデレーションズカップにおけるボランティアの関わりについて意見を述べたところ、同大会やワールドカップ本大会の経験がその後のJリーグにつながるという意識を持っている方(特に開催地以外のリーダーにおいて)が少ないと感じた。「皆で何かJAWOCに対して呼びかけをしましょう」と投げかけても、「開催地ではないので関係ない」や「敵対したくない」、「クラブの方針がハッキリしていないので、現段階では動けない」等の反応、もしくは意思表示なしが多数であり、積極的な動きができない状況であった。

その一方で、「運営ノウハウを参考にできる」「大会の盛り上がり、本大会後の観客やボランティア仲間の獲得につながり、クラブの運営を助けられる」等の意見もあり、お互いの協力体制が少しできた。このように、リーダーレベルでさえも、ワールドカップに関するボランティア活動に対して、かなりの意識差があるのが現状。

2) 日本代表レベルのボランティア活動を取り巻く環境

日本代表レベルの試合は、開催されるスタジアムがある県のサッカー協会が運営している。例えば、国立競技場で行われる時は東京都サッカー協会、駒場スタジアムだと埼玉県サッカー協会、横浜国際総合競技場だと神奈川県サッカー協会となり、ボランティアの任用もそれぞれの開催県サッカー協会が行っている。例えば五輪壮行試合が駒場スタジアムで行われた時は、県協会が、浦和のボランティアが所属するクラブの後援会に依頼をし、後援会がさらに私たちに依頼する仕組みだった。

こうして浦和は代表レベルでのボランティア活動の経験ができたが、横浜国際総合競技場所属のボランティアは、コンフェデレーションズカップが初めてとなる。彼等は2002年のワールドカップにおけるボランティア活動を目的として募集されたが、これまで多くの試合があったにもかかわらず、ボランティア活動の機会はなかった。それは、彼等の活動を取り巻く環境が複雑で、調整が難しいためだと考えられる。

彼等はスタジアム所属のボランティアであり、横浜国際総合競技場での催事を運営する団体の要請により活動を行う。日本代表の試合の場合は神奈川県サッカー協会からの活動依頼となるが、今まで依頼はなかった。スタジアムは横浜市所有のため、催事が横浜市主催だと活動の調整が比較的やさしいが、県レベルの主催の場合、複雑な調整が必要なのかもしれない。また、Jリーグが発足し、クラブの運営を補助する歴史の新しいボランティア活動の仕組みと、昔から日本代表をサポートしてきた都道府県サッカー協会が作り上げてきたボランティア活動の仕組みが複雑に絡み合い、それを調整する間もなく今日まで

来てしまったこともあるかもしれない。

4. シンポジウム開催の意味

1) ワールドカップ・ボランティアの参考になる

特に開催地横浜では、競技場のボランティアがワールドカップを目的として集められたため、Jリーグのサポーター、一般市民、ボランティア団体に属する者から構成され、これらと共に、サッカー協会の呼びかけによる参加者がボランティア活動をする。この点から、ボランティアの構成人数と活動状況は、他の本大会開催地にとって参考になるだろう。

2) Jリーグボランティアの参考になる

ワールドカップ前後に大競技場でのボランティア活動を余儀なくされるクラブも多く、今大会は、活動人数、業務内容、数の割り振りなど、今後の活動の目安となる。さらに、コンフェデ杯やワールドカップ等の日本代表レベルの試合がJの活動と無関係でないことを認識してもらえる機会になるだろう。

3) JボランティアとFA(サッカー協会)ボランティアの交流の機会になる

Jリーグの運営を補助するボランティアと、昔からずっとサッカーをささえてきたボランティアが、お互いを理解するためのよい機会だと考える。このような機会を持つことで、本大会を支える基盤を整え、本大会後もサッカーやスポーツをささえる仲間として、お互いが活動しやすいフィールドづくりを進めていくための足がかりとなることが期待できる。

<ディスカッション>

●プロジェクトの意義

・Jボランティアにとって、コンフェデ杯を総括することに意義があるのか。単純に言って、「Jリーグには外国のサポーターは来ない」と言うのではないか。また、ワールドカップボランティアの募集が6月末で締め切られる中で、7月下旬のシンポジウムのタイムラグはどう見るか

・クラブにとって役に立つことはあるはず。特に、ワールドカップ後に残される大規模競技場の運営は、Jボランティアも未経験。

●運営形態について

・浦和レッズの試合の場合、運営本部(クラブ)のもとに、シミズスポーツと浦和レッズスチュワード(ボランティア)がついて、それぞれに割り当てられた仕事をするようになっている。ボランティアが何をするかは各クラブの裁量で、例えばボールボーイは、磐田では地元の中学生、柏では地域の小学生がやっているが、浦和では危険なので、シミズスポーツがやっている。浦和ではスチュワードは、チケットのもぎり、

案内、障害者のサポート、インフォメーション、ごみ捨てなど、様々な仕事を行っている。ただ、分業の弊害もあり、どこを誰がやるのかわからなくなることもある。代表のゲームがどうなっているのか調査したい。

- ・代表のゲームでは、運営本部は主管する都道府県のサッカー協会であり、運営ボランティアのところに、協会傘下の連盟より動員される関係者(FA ボランティア)が入ってくる。

- ・学連も基本的に構図は似ている。学連本部が指揮系統のトップで、その下に各大学の学生がいて、様々な仕事をする。日韓学生選抜戦などの大きな試合では、シミズスポーツを雇うこともあるので、Jの運営と同じ仕組みになる。天皇杯や高円宮杯など、国立競技場での大きな試合になると、東京協会から、関東学連、都学連、高体連、社会人連盟等に声がかかることもある。

- ・高校選手権も同様。毎年東京や神奈川、千葉の高体連委員(教員)や生徒は正月返上で運営に駆り出される。シミズスポーツは、Jリーグ開幕前後から入ってきたように思う。93年のU-17世界選手権のとき、スタンド最前列の警備は高体連の教員や高校生がやっていた。しかし、ガーナやナイジェリアのサポーターを抑えられるわけがないし、警備の高校生に事故があったときに大変なことになる。この頃から、警備にはシミズスポーツが入るようになり、そこに大きな経費がかかるようになった。

- ・見た目には「シミズスポーツとボランティア」のように分かれてしまっているが、本当は業務が先にあって、それを分担してやっているということではないか。

- ・ボランティアの中には、なぜこの仕事させてもらえないのといった不満や誤解はある。

●ボランティアとはそもそも何か

- ・自分で考えて誰かに貢献したいというのが本来のボランティアだろうが、ワールドカップ・ボランティアの募集をみても、「ボランティアってすばらしいですよ」と啓蒙しながら募集をかけている。どこか強制しているようなところが感じられる。本来は、上の人が決めるのではなく、市民レベルで「私はこんなことができる」と言ってもらって許可制にするべきではないか。

- ・もともとは、サッカーをやろうとした人だけで、チケットもぎりをしたりボールボーイをやっていた。「自分たちが楽しむ」ために、自分たちの環境をつくっていた。それが徐々に認められて観客も多くなり、これじゃあやりきれないなということで、お金を払ってその道のプロを雇うようになってきた。最初にボランティアありき。スポーツってそういうものだと思う。

- ・大規模サッカーイベントにどういう業務が必要かは、知っている人は知っているけど知らない人の方が多い。どんな業務があるのか、どのような能力が要求されているのかが明確でないから、高体連や学連の動員では、「じゃあ〇〇大学は駐車場ね」という形で、その人の能力を抜きにして割り振られ、行かさ

れる。行かされている者も、自分の能力を発揮している自覚はない。先生に言われて行っているだけ。けど、サッカー好きなので、とりあえずイベントに関わることができて満足している。この繰り返し。まずどんな業務があって、そこにどんな能力が要求されるのか。例えば「警備は素人では危ない」こと等を明らかにしていくことが必要ではないか。それを市民に投げかけることによって、眠っていた人材を掘り起こすことができるだろうし、そうすることで本来のボランティアにつながるのではないか。

●シンポジウムの内容について

- ・演者は、運営側、市民団体、ボランティアの立場から、鹿嶋、新潟、横浜の3地域から報告してもらう予定。

- ・万代ファンヴィレッジの様態については、日本サポーター協会(JSA)がビデオを撮るので活用できる・来場者の視点もほしい。周辺イベントをささえる商店街の人などを含め、まち全体で楽しむところも取り上げたい。ボランティアの視点も、業務内容の総括だけでなく、ボランティアからみた運営、運営からみたボランティア、来場者からみたボランティアなど、イベント全体をボランティアからみることもあった方がいい。

- ・サッカーをブームでなく文化にしたい。それには歴史が必要だが、歴史が浅いところに世界最大のイベントが来てしまった。ボランティアはスポーツ文化には不可欠だが、あまりにもワールドカップを「目標」にしてしまうと、2002年以後に続かない。2002年は一つのゴールには違いないが、あくまでも通過点であることを強調してほしい。

●シンポジウムの運営について

- ・経費は、会場費、講師謝礼、報告書などをあわせて、ざっと20万円か。参加費を徴収し、広告代(賛助金)を一口1万円程度で募りたい。出資者のメリットも考えたい。

- ・主旨に賛同して気持ちよくお金を出してくれる人に出していただき、報告書に名前や広告を掲載する形で気持ちに込めたい。また、一民間団体が勝手にやっているというのではなく、ある程度オーソライズされたものにしたいので、神奈川県協会及びJAWOC横浜支部の後援を取り付けるべく準備中。また、JSAをはじめ、志を同じくする団体とも連携をとりながらやっていきたい。

●今後について

- ・ワールドカップが終わって残っていくのはJリーグだけではない。大学サッカーも高校サッカーも少年サッカーもみんな残っていく。むしろこういった底辺を支えているボランティアがいなくなっていることに問題があるのではないか。

・サッカーのサポートだけでなく、スポーツ全体をサポートする視点が必要。浦和に住んでいる市民のために、Jのボランティアがバスケットボール大会を開くなど。いろんなスポーツを体験できる環境作りも、ボランティアが活動に関わることによって広がっていくのではないかな。

<感想・意見(中塚義実)>

「ボランティアとは何か」「スポーツをささえるとはどういうことか」について考えた。

筑波大学附属高校のグラウンドは、都心にありながらほぼ正規のピッチがとれるので、高体連やDUOリーグ等の会場になることが多い。大会当日はライン引きやグラウンド整備、更衣場所(青空更衣?)や立入禁止区域の指示、ゴミの分別、選手証のチェックや審判手当ての支払等、高校生スタッフを動員しながらあたる仕事をこなしている。ゴミ、車、破損、盗難には特に気をつけねばならない。地区大会、都大会と規模が大きくなるにつれ、配慮すべき事項も増えてくる。正月の高校選手権ではシミズスポーツと協力して応援団の入れ替えもする。雪が降れば雪かきもする。"何でもやさん"である。

高体連等でいつも大会運営をしている私のような人間は、今回の分類でいくと、「昔からずっとサッカーをささえてきたボランティア」、すなわち「FAボランティア」ということになるのだろう。

けど「ボランティア」という意識はない。むしろ「責任感」の方が強い。サッカーを"ささえる"、価値ある「仕事」という感じか。だから、これが全て「無償の奉仕活動」だと「やってられない」と思うだろうし、スポーツを"ささえる"活動の地位を高めるためにも、評価(対価)はきちんと求めたい(し、そういう仕組みを作っていきたい)。東京都高体連の委員の日当は、1人3,300円(プラス昼食)。これが多いか少ないかはわからないし、手当てが支給されようがされまいが、やる人はやるしやらない人はやらない。そして、やらない人が増えてきたから学校運動部が成り立たなくなってきたのも事実である。教員をはじめとする「FAボランティア」だけでは、底辺のサッカーはささえきれない。

Jリーグができて、運営補助のボランティア活動に多くの市民が参加されているのはとてもいいことだと思う。しかし、サッカーはJリーグだけではない。むしろ底辺のサッカーにこそボランティアが必要であり、そこは依然として、教員をはじめとする「FAボランティア」の「責任感」によってささえられているのだということも知っておいてほしい。「Jボランティア」がいろんな経験を積んで、底辺のサッカー、あるいはサッカー以外のスポーツをささえる存在になってくれればいいと思う。

"する"ことも"みる"ことも、そして"ささえる"こともスポーツの楽しさである。その楽しさを知っている人がもっとも増えてくれればいいと思う。「ささえるスポーツ(ささえることそのものがスポーツ)」は確かにある。